



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 48

Mar. 2013

今号のトピックス

第 12 回大会が 3 月 14 日～17 日に千葉大学で開催されます
(公開講演会は 3 月 17 日 13:00～16:00)

学会賞・奨励賞・論文賞が決定しました



目 次

新会長あいさつ	2
新評議員あいさつ.....	3
役員等一覧	4
会計幹事の交代について.....	4
絶滅危惧植物専門第一委員会の活動について	5
諸報告	
2012 年度日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)受賞者の決定.....	5
2012 年度日本植物分類学会論文賞の決定	7
2012 年度日本植物分類学会講演会の報告	7
植物分類学会講演会に参加して.....	8
2012 年度第 3 回メール評議員会議事抄録	11
2013 年度第 1 回メール評議員会議事抄録	11
お知らせ	
日本植物分類学会第 12 回大会公開シンポジウム	
「千葉県における植物の個体群保全・生態系再生の試み」のご案内.....	12
評議員会開催のお知らせ	12
2013 年度総会のお知らせと審議事項	13
寄稿	
学名のラテン語(12)	18
書評	19
会員消息	20



新会長あいさつ

角野 康郎(神戸大学大学院理学研究科)

今回の会長選挙から、候補者を評議員会が推薦した上で投票を行うというやり方が導入されました。票が分散してわずかな得票で会長が決まる状況を改善するねらいでした。推薦された3人から私が会長に選ばれる結果になりました。私は植物生態学の出身であり、分類学会会長としては私よりもふさわしい方がおられるという思いはありましたが、選ばれた以上、職責を果たそうと覚悟しました。宜しくお願いします。

近年、生物多様性が生物学のテーマとしてだけでなく、人間社会の健全な発展のためにも重要であることが広く認識されるようになりました。しかし、多様性を研究するもっとも基礎的な分野である分類学のおかれている状況は、決して楽観できるものではありません。発展する生物学のさまざまな分野の中で、その存在意義が十分に理解されないまま、厳しい状況に追い込まれてきたのは世界に共通する流れです。分類学者は「絶滅危惧種」と言われて久しく、植物分類学に限っても、大学の研究室の取り潰しや、その結果として後継者の養成難、そしてせつかく植物分類学の研究で学位をとっても就職ポストが限られるという厳しい現実が生じてきました。これは将来の生物学の根幹に関わる問題であり、分類学会連合や自然史学会連合と協調して、地道に取り組んでいかなければならない課題です。植物分類学会としても、積極的に関わっていきたくて考えています。

さらに日本の植物分類学の将来を支える上で、差し迫った問題があります。昨年までの4年間、私は絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長として環境省のレッドリスト見直し現地調査にかかわってきました。日本の維管束植物レッドリストは、絶滅確率という定量的な基準をカテゴリー判定に世界で最初に導入した誇れるものです。それを支えたのは全国47都道府県の500人をこえる調査員から寄せられた現場の資料でした。地域のフォロー調査を進める在野の研究者や植物愛好者の熱意ある協力で日本のレッドリストは信頼性の高いものに仕上がっています。これは他の国では例のないことです。

しかし、調査の取りまとめを進めながら、10年後に同じ調査がはたして可能だろうかという不安を感じるものがしばしばありました。今回の調査では各都道府県の主任調査員をできるだけ地元の大学や博物館の方をお願いしたのですが、分類学の研究室のある大学も博物館もなく、在野の研究者にお世話になった府県がたくさんあります。その多くの方がご高齢でした。現在、日本のほぼ全ての都道府県に植物研究会あるいはフォロー調査会といった人的ネットワークが存在します。そして、その精力的な活動が日本のフォロー研究に新しい知見をもたらし、レッドリスト見直しの現地調査も可能になっています。しかし、ほとんどの地域でメンバーの高齢化が問題になっています。若手が育っていないのです。後継者難のために世代交代が進まないという現実につきあたっています。

もうひとつの問題は、植物調査に限らず自然史研究の拠点が各地域に十分に整っていないという状況です。県立博物館でも少人数で植物全般を広くカバーして、現地調査から標本の管理までこなさなければならない現実があります。たったひとりの植物担当学芸員が地域のフォロー調査を支えている町立博物館もあります。さらに、標本を集めても、それを保管する自然系の博物館等の施設がない地域は、未だ全国には少なくありません。今年の1月には分類学会連合主催で「自然史標本の公的保護をめざして」というシンポジウムが企画されました。文化財が法律によって手厚く守られているのに対し、自然史標本には公的保護の仕組みがありません。このような課題は、日本学術会議等でも議論が始まっていると聞いていますが、標本の重要性に対する認識は、まだまだ低いのが現状です。植物分類学会が尽力しなければならない問題であろうと考えています。

植物分類学が生き延びていくためには、世界に通用する研究を進め、国際誌にどんどん論文を発表しなければならない。日本植物分類学会は、そのような方向に進むべきだという意見があることは承知しています。またそのようにしなければ研究者の世界で生き残っていけない現実も、十分認識しています。しかし、自分の研究対象とする植物群のことしか知らない、あるいは植物の姿よりもDNAに関心があるという

ような研究者ばかりになったとき、植物分類学に未来はあるでしょうか。新たなアイデアや手法を用いた最先端の分類学研究が行われることは大切です。研究者を目指す若手の方はおいに頑張ってくださいと思います。

しかし、分類学はそのような研究だけでは成り立ちません。裾野の広がりがあってこそ、頂上がそびえ立つのだということを忘れてたくありません。また植物の研究が進んだときに、現地からは多くの植物たちが姿を消していたというようなことになっては研究の意義が問われます。日本の植物相の解明とモニタリングを今後も充実させていくためには在野の研究者の層を厚くすること、地域の自然史研究の拠点の強化に取り組むことが重要な課題であると考えています。どのような取り組みが有効なのかは議論が必要ですが、そのためには現場の声を会員の皆さんで共有することが前提になります。

植物分類学会 10 周年記念事業として昨年発行された『新しい植物分類学 1, 2』(講談社)はたいへん好評とのこと。この 2 冊の本は、日本の植物分類学者が世界に通用するすばらしい成果を上げているからこそできあがったものでしょう。一方で、上に述べたように先延ばしできない深刻な課題もあります。そのような現状を考えると、英文誌 APG の充実とともに、和文誌やこのニュースレターを大切にすることが重要であろうというのが私の意見です。会員の皆様には、これらの媒体をおおいに活用して、さまざまな情報やご意見をいただきたいと希望しています。

ここまでを読み、ずいぶん後ろ向きで、遅れてきた青年(老年?)のような挨拶と感じられた方がおられるかも知れません。しかし、これは決して後ろ向きの問題提起ではありません。植物分類学会は多くの優秀な中堅、若手の会員を擁していますので、新しい研究はどんどん進むものと楽観しています。私に会長として果たせる役割があるとすれば、上述したような現場の課題と取り組むことであると考えている次第です。

新評議員あいさつ

評議員 西田 佐知子

今期の2年間、評議員を務めることとなりました。僭越ですが、12名の評議員の代表としてご挨拶申し上げます。なお、私は前期に引き続いての任務です。新しい評議員ともども、どうぞよろしくお願いいたします。

前期の話になりますが、記念すべき学会10周年が東日本大震災と重なり、一昨年は記念大会関連の処理などで慌ただしく時が過ぎていきました。そこから体制を整えた末、昨年は大阪大会も無事開かれ、学会活動もほぼ通常に戻った気がします。分類学関連本も出版され、今期を迎える助走がついた状態だといえるかもしれません。

ただ、学会がある程度落ち着いたとはいえ、日本はまだ落ち着いたとはいえません。震災の被害を受けた植物分類学関連の施設、研究者、標本、自然環境に、学会が今後どのような形で関わりつつけるのか、会員のみなんで考えていく仕事があります。そんなとき、学会の活動を会員の目から評価し、意見し、協力していくのが評議員の役目ではないかと思えます。

もちろん震災関係だけではありません。植物分類学の活動を活発にするために学会として何が必要なのか、学会員にとって学会の魅力を増やすには何をすればいいのか、みなんで話し合いつつ模索していきたいと思えます。

学会のことでご意見があるときはぜひ、私をはじめ、みなさんの周りにいる評議員に声をかけてみてください。みなさんの代表であることを忘れずに、この2年間務めを果たしていきたいと思えます。くりかえしになりますが、この2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

役員等一覧 (任期:2013年1月1日~2014年12月31日) ---

庶務幹事 志賀 隆

今期の役員等および委員会委員長が以下のように決まりましたので報告いたします。

会長:角野康郎

庶務幹事*: 志賀 隆

会計幹事*: 保坂 健太郎

図書幹事*: 鈴木 武

ニュースレター担当幹事*: 海老原 淳

ホームページ担当幹事*: 福原 達人

編集委員長: 田村 実

和文誌編集委員長: 東 浩司

英文誌編集担当委員: 田村 実

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員: 黒沢 高秀

自然史学会連合担当委員: 西田 治文

講演会担当委員: 岡崎 純子

野外研修会担当委員: 西野 貴子

学術会議若手アカデミー担当委員#: 奥山 雄大

*会則第 11 条で定める幹事(連続二期まで)

#今年度より新設

評議員: 秋山 弘之, 池田 博, 大村 嘉人, 梶田 忠, 副島 顕子, 田村 実, 仲田 崇志, 永益 英敏, 西田 佐知子, 西田 治文, 藤井 伸二, 村上 哲明

監事: 吹春 俊光, 池田 博(今年度の総会まで)

委員会:

編集委員会: 田村 実(編集委員長), 東 浩司(和文誌編集委員長), 秋山 弘之, 海老原 淳, 大村 嘉人, 川窪 伸光, 黒沢 高秀, 高橋 英樹, 高宮 正之, 坪田 博美, 仲田 崇志, 永益 英敏, 西田 治文, 福原 達人, 藤井 伸二, 村上 哲明, 米倉 浩司, 綿野 泰行, David E. Boufford, Jae-Hong Pak, Ching-I Peng, Benito C. Tan

絶滅危惧植物専門第一委員会: 藤井 伸二(委員長), 海老原 淳, 勝山 輝男, 加藤 英寿, 角野 康郎, 川窪 伸光, 黒沢 高秀, 志賀 隆, 芹沢 俊介, 高橋 英樹, 高宮 正之, 藤田 卓, 矢原 徹一, 横田 昌嗣, 米倉 浩司

絶滅危惧植物専門第二委員会: 樋口 正信(委員長)

植物データベース専門委員会: 伊藤 元己(委員長)

学会賞選考委員会: 高宮 正之(委員長)

国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会: 大橋 広好(委員長)

会計幹事の交代について ---

会長 角野 康郎

先のニュースレターで, 本年 1 月からの会計幹事を, 池田 啓さん(国立科学博物館)とお知らせしまし

たが、諸般の事情で保坂 健太郎さん(国立科学博物館)に交代することになりました。今後、会計幹事担当の業務は、下記まで連絡をお願いします。

会計幹事(入会申込み, 住所変更, 退会, 会費納入, 購読申込みなど)

保坂 健太郎(ほさか けんたろう)

〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

国立科学博物館 植物研究部

電話: 029-853-8967; ファックス: 029-853-8401

電子メール: khosaka@kahaku.go.jp

絶滅危惧植物専門第一委員会の活動について

絶滅危惧植物専門第一委員会委員長 藤井 伸二

新年度から、委員会の名称が絶滅危惧植物専門第一委員会に変更されました(旧名称:絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会)。また、前委員長の角野康郎氏(現会長)の後任に私(藤井伸二)が新委員長に就任し、旧委員の継続に加えて新進気鋭の若手3名の新委員を迎えました。委員の構成については役員等一覧をご参照ください。

本委員会では、日本産維管束植物のレッドリストおよびレッドデータブックの作成を行っています。昨年の8月に環境省から公表されたレッドリストはその成果です。現地調査と情報の収集については、会員の皆様に多大なご協力を頂きました。調査期間が短く、ご無理なお願いをしたにもかかわらず、多くの貴重なデータが集まりました。皆様の調査への献身的なご協力につきまして、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

新年度の事業として、レッドデータブックの作成を予定しています。2000年以來十数年ぶりの改訂になるたいへんな事業ですが、絶滅危惧種の保全に貢献できるように委員会として全力で取り組みたいと思います。会員諸氏のご協力・ご援助をいただければ幸いです。

「新会長あいさつ」にもありますように、絶滅危惧植物の調査において地域フロラ研究の果たす役割はたいへん重要です。今後の委員会活動では、今にも増して地域の会員諸氏との繋がりを大切に、収集データを使った研究成果についてはできるだけ還元していくようにしたいと考えています。

諸報告

2012年度日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 高宮 正之

本年度は合わせて10名の候補者が推薦されました。学会賞選考委員会において、ご本人あるいは推薦人から提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料等をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞は2名の方に、奨励賞は2名の方に授与することに決定いたしました。

学会賞

瀬戸口 浩彰 氏(京都大学大学院人間・環境学研究科 教授)

「系統地理と環境適応を基盤した植物の種分化研究」

谷城 勝弘 氏(千葉県立佐原高等学校 教諭)

「カヤツリグサ科植物の種間雑種とその形成要因に関する研究」

奨励賞

土金 勇樹 氏(日本女子大学理学部 学術研究員)

「藻類を用いた種分化研究；性フェロモンによる生殖隔離と生殖様式の進化」

布施 静香氏(兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)

「広義ユリ科を中心とした種生物学的研究」

(それぞれ 50 音順)

なお、授賞理由は以下の通りです。

学会賞

瀬戸口 浩彰氏は、植物の系統や系統地理学を基盤とした進化多様性に関する研究を行ってこられました。系統地理学研究では、主に南半球(南太平洋域と Gondwana 大陸由来の地域)や東アジア地域、ならびに国内を対象として、地形の変遷や気候変動に伴う植物の分布域変遷、レフュジア推定を進められました。さらには得られた結果に基づいて、地域ごとの環境に植物が適応進化していく機構を明らかにするべく、具体的な遺伝子の特定を行う研究も進められておられます。また、研究の過程において絶滅に瀕した植物集団を見出しては、その保護に資する研究と実践につながる活動を進めておられます。日本植物分類学会では、評議員、英文誌・和文誌編集委員を歴任され、会の発展につくされました。これらの功績は、日本植物分類学会賞にふさわしいと評価されました。

谷城 勝弘氏は、現役高校教師の傍ら、カヤツリグサ科、ミクリ科、ホシクサ科等の湿性植物やシダ植物の分類学的研究を行って来られました。また、千葉県植物誌や千葉県レッドデータブックなどの編纂に貢献されました。一般向けに出版された『カヤツリグサ科入門図鑑』と『野外観察ハンドブック シダ植物』の2冊の図鑑は、分類に必要な形態形質を、生態情報をも加えた沢山の見易い写真をもとに解説し、一般には難しいとされるこれらの植物の同定に役立つばかりで無く、専門用語や微細な構造を学ぶこともできる画期的な書となりました。高校のクラブ指導をもとに、若い世代への分類学の教育普及にも大いに貢献されました。これらの功績は、日本植物分類学会賞にふさわしいと評価されました。

このように、上記2名は、植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、日本植物分類学会賞を授与することいたしました。

奨励賞

土金 勇樹氏は、ホシミドロ目に含まれる藻類であるミカツキモ属を主な研究材料として、種分化機構の解析を行なってこられました。ヘテロタリク株の有性生殖では、タンパク質性の性フェロモンにより雌雄認識が行なわれており、それぞれが生殖隔離した集団を用いる事で、性フェロモンの認識の低下が生殖隔離の原因の一つであることを明らかにされました。また、生殖様式の進化を明らかにするため、詳細が不明であったホモタリズムと呼ばれる生殖様式に注目し、その実体が「自殖」であることを解明されました。また、藻類の接合過程が iPhone 上で簡単に観察できる無料の教育ソフトを開発され、研究者ばかりでなく、中、高等学校への教育・普及に貢献されました。これらの功績が高く評価されました。

布施 静香氏は、単子葉植物の分類を中心に研究を進めてこられました。高い解像度の分子系統樹を構築し、広義ユリ科植物の分類再編の基盤となる研究や、ショウジョウバカマ属について、分類の整理や新種記載の他、マイクロハビタットによる種の維持機構の存在についても研究されました。また、単子葉植物全体の分子系統樹の構築にも携わり、チシマゼキショウ科、キンコウカ科、タケシマラン属などについては種間の系統関係を明らかにされました。また、在野の研究者との共同研究や県フロアのとりまとめにも尽力してこられ、博物館所属研究員として幼児から高齢者までを対象にこれまでに 100 回以上の講座を開催し、植物に関する教育活動にも力を注いでこられました。日本植物分類学会では、図書幹事や講演会担当委員を努められ、会の発展につくされました。これらの業績が高く評価されました。

このように、上記2名は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、日本植物分類学会奨励賞を授与することいたしました。

2012 年度日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 田村 実

2012 年度日本植物分類学会論文賞は、2012 年に出版された『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』および『分類』に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文4編を論文賞選考委員会において審査し、次の2論文に決定しました。

Werukamkul, P., L. Ampornpan, S. Koi & M. Kato. 2012. Taxonomic study of Podostemaceae in Loei Province, Northeastern Thailand. Acta Phytotax. Geobot. 63 (1): 11-28.

選考理由: 河川での野外調査、標本作製、詳細な形態観察の結果に基づいた記載分類学の論文で、4新種、タイ新産2種の報告や明快な検索表を含んでおり、カワゴケソウ科の分類学ならびにタイの植物相解明に大きく貢献している。

Yamashiro, T., A. Yamashiro, M. Ogawa, N. Kurosaki, T. Kobayashi & M. Maki. 2012. High population genetic diversity and regional differentiation in the endemic *Vincetoxicum katoi*-*V. yamanakae* complex (Apocynaceae; Asclepiadoideae) in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 63 (1): 29-40.

選考理由: 分布域全域からの試料に基づいた形態解析とアロザイム解析を行うことにより形態的変異と遺伝的変異を明らかにした上で、絶滅危惧種のクサナギオゴケとヤマワキオゴケを同種と結論づけている。最終的な分類学的結論を導いた科学的理由を明確に示した論文であり、高く評価できる。

2012 年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 岡崎 純子

2012 年度の日本植物分類学会講演会が 2012 年 12 月 22 日(土)に大阪学院大学で開催されました。現在の植物分類学会が設立されてから 12 回目の講演会となります。今回は 96 名(学生 19 名)の参加者がありました。ご講演頂いた演者とその演題は以下のとおりです。

川窪 伸光(岐阜大学応用生物科学部): 微速度・高速度撮影によるナチュラリスト感性の映像化の試み

田中 伸幸(高知県立牧野植物園): カンナ科とはどんな植物か～その混乱する分類と課題～

山本 武能(京都大学大学院理学研究科): ビーベルシュタイニア科の花と生殖器官の発生学的研究

水田 光雄(近畿植物同好会): 新しい帰化植物の話題と侵入経路

中西 弘樹(長崎大学教育学部): 南方系植物分布北上の植物地理

高橋 正道(新潟大学理学部自然環境科学科): 白亜紀に咲いていた初期の被子植物の花を探す遙かなる旅路の先にあるものは?

川窪伸光さんの潮の満ち引きの鮮やかな映像(なんと川窪さん作編集の音楽入り)ではじまり、高橋正道さんのこれまた美しい白亜紀化石の3D 解析画像で終わるとい、大阪学院大の巨大スクリーンを最大限活用し一日中映画館で勉強したような内容豊かな講演会でした。

花卉園芸植物の多いカンナ科や初めて知ったビーベルシュタイニア科、今も新たな侵入定着の見られる帰化植物の現状、長崎を中心とする九州の植物の分布変遷などのお話もそれぞれの方々の研究の進展をもとに話題提供しわかりやすく解説して頂きました。参加者の方々からも熱心な質問が相次ぎました。

また、終了後に開催された懇親会には 30 名の参加者があり、田中伸幸さんが牧野植物園と地元の酒造メーカーで共同開発した食用カンナのお酒「美人蕉酒」を高知から運んでくださり、参加者皆で味わってみるという楽しいひとときも過ごせました。アマチュア研究者の方々も多く参加して活気のある懇親会でした。

今回の話題を提供して下さった 6 人の演者の方々、遠方より足をお運び下さった参加者の皆様方、お忙しい中会場の提供と準備をして下さった大阪学院大の林一彦先生に感謝いたします。

植物分類学会講演会に参加して

根路銘 恒次(大阪教育大学大学院)

2012 年度日本植物分類学会講演会が 12 月 22 日(土)に開催されました。昨年参加した講演会と同様に大阪学院大学で行われるということで、とても広く、設備が整っていました。植物の学術的な内容に関して初心者といってもよい僕ら学生や一般の方々も参加し、講演内容も専門的な話から一般向けにわかりやすいタイトルの話まで多岐にわたっており、また普段は聞くことが出来ないような貴重な御話を専門家である先生の方々から伺うことが出来るのではと、参加前からとても期待を膨らませていました。

最初の川窪先生は微速度・高速度撮影を用いた自然観察について講演して下さいました。川窪先生がこのような方法を用いるようになった理由は、写真を撮影しているときに自然環境が季節変化をしていく様子を想像しながら撮影をしていることに気付き、その変化をどうにか表現出来ないだろうか考えるようになったからとおっしゃっていました。その例として、浦内川(西表島に流れる河川)を高速度撮影した動画では、潮が満ち引きする様子がよく分かり、とても幻想的でした。続いて、セセリチョウという林縁に沿って飛ぶ種が飛ぶ様子も高速度撮影をして初めて、空中で一瞬静止しているということが分かり、非常に貴重な映像でした。映像、音楽の編集まで全て川窪先生が行っており、とても凄かったです。また、ある花に興味を持って毎日観察をしているとしても、それは日中のことであり、夜中に花がどのような姿をしているかは研究者でさえ分かっておらず、継続調査を行うにしても数週間が限度であるということにも言及されていました。そこで、現在販売されているデジタルカメラには様々な機能が備わっており、中でもインターバル撮影、高速度撮影を簡単に行うことができるようになってきているため、継続調査が誰

もが挑戦できるものになったと仰っていました。僕自身、訪花昆虫の観察を行ったことがあるので、今回御話して頂いたインターバル撮影、高速度撮影という新しい手法を今後の研究に是非とも取り入れてみたいと感じました。

田中先生はカンナ科について紹介して下さいました。カンナ科はショウガ目に分類されており、ショウガ目には他にオウムバナ科、バショウ科、オオホザキアヤメ科、ゴクラクチョウカ科、クズウコン科、ショウガ科があり、どれも日本には馴染みがない種類ばかりでした。日本ではガーデンカンナと呼ばれる大きなオレンジ色の花をつける観賞用のカンナが有名であり、また南西諸島から本州の温暖な地域にはダンドクと呼ばれる種も帰化しているとのことでした。カンナ科はドイツの研究者クレンツリンによって 60 種に分類されていましたが、その後オランダの研究者は 10 種程度であると報告しているらしく、研究者によって意見が大きく異なっていました。その原因は、カンナ科は形態が単純で分類形質に乏しいのに変異が大きいということが大きな要因であり、また腊葉標本では判断が難しく、標本数も少ないということも仰っていました。単純



図1. カンナ科について講演する田中伸幸さん

な形質を一つ一つ比較していくことは、気が遠くなる作業だと感じました。カンナ科は $2n=18$ の核型ですが、*Canna discolor* だけが $2n=27$ の異質倍数体であるため、何らかの交雑種だろうと考えられ、それを確認するために FISH 法を用いて染色体上の遺伝子座の組合せを検討していました。その結果 *C. discolor* は、*C. indica* と *C. plurituberosa* の交雑種であることが分かりました。学校で学習してきた遺伝子の組換えがこのような形で応用されていることに驚きました。またカンナ科の植物は、披針形で筒形の花弁を 3 枚持ち、一見花弁のように見えるものは雄しべが変化したもの(弁化雄蕊)であり、弁化雄蕊の中でも特に外側に反り返ったもの(唇弁)にだけ雄機能があるという非常に特異な形態をしていました。食用カンナとされる *C. edulis* の原産は南米であり、デンプンを取りだして麺にして食べるのだそうです。カンナ科の根茎に蓄えられるデンプン粒は $144 \mu\text{m}$ と非常に多く、貧栄養な土壌でも生育できることから東南アジアを中心に好んで食されているそうです。食文化についても解説して頂けるとは思っていなかったので、とても勉強になりました。

次の山本さんは、ビーベルシュタイニア科の生殖発生器官について解説して下さいました。ビーベルシュタイニア科という植物を初めて聞いたのですが、木本のムクロジ目には珍しい草本植物であり、1 属 4 種から構成されている分類群だということです。中国から中央アジア、ギリシャに分布していて 1996 年にギリシャで再発見されるまでは絶滅してしまったと考えられていました。また以前からハマビシ科、バラ科、フウロソウ科との類縁関係が指摘されていて、1867 年にフウロソウ科に分類されていたようです。確かにハクサンフウロと *Biebersteinia odora* の外部形態はそっくりでした。しかし、*B. odora* の系統解析の結果から、フウロソウ科ではなくムクロジ目のクレード内で独立していることが判明し、続けてビーベルシュタイニア科 4 種の系統解析によってビーベルシュタイニア科は単系統群であり、最も初期に分離した可能性があるということで、ビーベルシュタイニア科と他のムクロジ目植物に共通する形態を発見するために、様々な発生段階の生殖器官の切片を作成し、生殖器官の内部構造を観察することから研究をされていました。各発生段階の 50 以上もの内部形態を観察することは、とても大変なこと

だと感じました。また切片の写真は、どれも鮮明でわかりやすく、切片作製方法にもとても興味が湧きました。実験結果から分かったことは 2 つあり、*Penaea* 型胚嚢と呼ばれる形態であること、およびタPERT細胞が多核化することでした。*Penaea* 型胚嚢は 4 胞子性の胚嚢で珍しい形態で、一般的な被子植物の 80%以上がタDE型と呼ばれる教科書でよく目にする胚嚢であることから、とても珍しい形態だということが分かりました。ムクロジ目ではカーキア科もビーベルシュタイニア科と同じく *Penaea* 型であり近縁性を示す手がかりではないかと考えられており、今後の詳しい研究報告が楽しみです。またタPERT細胞とは胞子形成組織に養分を供給する役割を果たしており、一般的には 1 細胞あたり 2 核だと考えられていますが、ビーベルシュタイニア科では少なくとも 7 核が観察されていました。タPERT細胞の多核化はムクロジ目に派生的に現れるのではないかとということで、こちらも今後の研究報告が楽しみです。

水田さんは帰化植物の侵入経路について御話して下さいました。実際、帰化植物は現在注目されていますが、どのような侵入経路で日本に侵入しているのか疑問に思っていました。しかし、今回の講演を聞かせていただいたことで具体的な侵入経路や種類について知ることが出来ました。帰化植物の原産地は様々ですが、アメリカウンランモドキ、アメリカオバコ、ハイコウリントンポポといった種は緑化用牧草として、ポンポンアザミは栽培種が逸出したことによって、ヒガタアシなどの水辺の植物はバラスト水の処理によって日本に侵入してきているということで、輸出入の機会が増加した現代社会だからこそ生じた問題なのだと感じました。さらに水田さんは既知の帰化植物の分布を調査しているだけでなく、シラユキキンギョソウ、ツルアメリカコナギといった新たに発見された帰化植物に命名をすることも行っていることを知り、とても驚きました。また紹介して下さいた写真はきれいなものばかりで、撮影場所も身近な場所が多く、身近な環境で紹介して頂いた以上の帰化植物が生育しているのだと考えると、非常に多くの植物が日本に侵入しているのだと改めて感じました。増加を続ける帰化植物の定着は日本の在来植物に多大な影響を与えます。しかし定着してしまった種を排除することは難しく、水田さんが最後に仰っていた通り「上手につきあっていくこと」が必要

なのだと思います。また帰化植物の侵入・定着の問題は日本に限らず、海外のどの国でも共通していることであるので、帰化植物について、より大きな視点を以て考える機会にしたいと思いました。

中西先生は、南方系植物の分布が北上していることについて講演して下さいました。本来、南方に分布している植物が日本の温暖化に伴って北上してきていることについて、4つの大きなテーマに分けて解説して下さいました。①九州西廻り分布型植物、②島嶼偏在型植物の分布と生態、③地球温暖化による北上、④最近発見された北限の南方系植物についてです。九州西廻り分布型植物にはコクテンギやヒメキランソウなどの33種が確認されており、等温線に沿った海流散布によって分散するため海岸部に多いということです。また鳥散布で拡散する種も多く、低木や草本が多いということも特徴として挙げられます。冬の寒さが北限を決定する鍵であり、植物の分布拡大は段階的に発生することが分かりました。島嶼偏在植物は小さな島に生育し、伐採など人の手が加わっていない自然度が高い島に多く見られます。また冬に温度があまり低下せず、台風の影響を強く受けるため、自然の攪乱が起こりやすいということも条件であることが分かりました。温暖化によって海流散布植物が増加していることは、年平均温度が推定 0.5°C 上昇していることに起因しています。気温上昇によって等温線が北上することに伴って、南方植物も北上しています。さらに海流によって漂着した種子は、海岸部で発芽し、グンバイヒルガオだけでも推定で毎年 500 粒の種子が発芽しており、発芽率と適応力の高さが主な要因だということが示されていました。そして最近、新たな分布地で見つかった植物として、アラゲサンショウソウ、ギョボク、ケホシダといった植物が北上していることが分かりました。これらは全て九州中部以南で確認されていた種であり、長崎県で確認されたということから、南方植物の北上が強く印象に残りました。また、南方植物が北上し、定着できる環境に日本が変化してしまったということを理解したことによって、日本の植物の分布や環境について考えを持つ機会になったと思います。

最後の演者の高橋先生は放射光と呼ばれる電磁波を用いた植物体の化石を解析する方法について解説して下さいました。化石の構造の解

析という内容で、とても楽しみにしていた講演の一つでした。恐竜が繁栄していたジュラ紀に生育していた現在の被子植物の祖先とも言える植物がどのような形態であったのか、どのような地形に生育していたのか、とても興味がありました。また講演を聴かせて頂いて、植物について知るためには植物に関する知識だけではなく、地質、気候といったものの知識を総合的に活用しなければならないと改めて感じました。化石を探すことも想像していたよりも難しく、まず化石が残りやすい地形かどうかを吟味する必要があるということは、とても時間を必要とするだろうと思いました。そして発見した化石の大きさもマッチ棒より遙かに小さく、研究の困難さを物語っているようでした。発見した化石は APS や SPring-8 といった大型放射光施設の機材を用いて解析され、花の内部構造がはっきりと把握できる画像であり、非常に多くの雄蕊を持っていることが分かりました。なぜ非常に多くの雄蕊を備える必要があったのか、また被子植物の起源となった種は現在のどのような地域であったのかということは今後の課題だと感じました。そして化石から古代の植物の内部構造を解析することは、現在の植物の進化の過程を知る上で重要な手がかりとなるのではないかと思います。

今回の講演会は様々な分野から構成されており、非常に多くのことを学ぶことができました。どの演題も一般向けに工夫されており、分かりやすく、今後の研究の参考にしたいと思います。講演をして下さった先生方、数々の貴重な御話をして頂きありがとうございました。



図2. 盛況だった懇親会の様子

2012 年度第 3 回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 西野 貴子

2012 年 12 月 12 日～2012 年 12 月 26 日に 2012 年度第 3 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は 2012 年度会計決算案と事業報告案を評議員の方々に審議していただくためのものです。なお、12 月末日が会計締切りであるため、この第 3 回メール評議員会での決算額に概算部分があります。2013 年 3 月 16 日の総会にて提案されます同議案には、その概算部分について最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時:2012 年 12 月 12 日～2012 年 12 月 26 日

開催方法:電子メール等の媒体を用いた会議

参加者:評議員全員

議長選出

慣例にしたがい、戸部博氏を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第 1 号議案 2012 年度 事業報告案

第 2 号議案 2012 年度 決算案

審議結果

- ・第 1 号議案は、賛成 12 票、反対 0 票、白票 1 票で承認された。
- ・第 2 号議案は、賛成 12 票、反対 0 票、白票 1 票で承認された。
- ・議事録署名人として大村嘉人氏と藤井紀行氏が選出された。

2013 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

2013 年 1 月 18 日～2013 年 2 月 1 日に 2013 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業報告案と事業計画案、会計決算案と予算案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする 3 月 14 日の評議員会と 16 日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時:2013 年 1 月 18 日～2013 年 2 月 1 日

開催方法:電子メール等の媒体を用いた会議

参加者:評議員全員

議長選出

慣例にしたがい角野康郎氏を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第 1 号議案 2013 年度事業計画案

第 2 号議案 2013 年度予算案

審議結果

第 1 号議案は、賛成 10 票、反対 0 票、白票 3 票で承認された。

第 2 号議案は、賛成 10 票、反対 0 票、白票 3 票で承認された。

議事録署名人として秋山弘之氏と副島顕子氏が選出された。

お知らせ**日本植物分類学会第 12 回大会公開シンポジウム****「千葉県における植物の個体群保全・生態系再生の試み」のご案内**

第 12 回大会会長 綿野泰行

【日時】 2013 年 3 月 17 日(日) 13:00~16:00

【場所】 千葉大学けやき会館大ホール(千葉市稲毛区弥生町 1-33)

【料金】 無料

【内容】

近年の人為的な環境破壊や地球温暖化等の気候変動により、多くの植物種や地域個体群が、絶滅の危機にさらされています。このシンポジウムでは、植物を絶滅から守るサイエンスについて理解を深めることを目的として、4人の専門家が講演を行い、千葉県内における植物の個体群保全・生態系再生の具体的な試みを紹介します。

どなたでもご来聴いただけます。また、事前の申込みならびに参加費は不要です。

皆様のご参加をお待ちしております。

【講演者と演題】

1. 百原新(千葉大・園芸) 房総半島の植物相・植生の発達史
2. 尾崎煙雄(千葉中央博) 房総の絶滅危惧ヒメコマツ個体群の現状と保全の試み
3. 岩崎貴也(東京大・総合文化) 房総のヒメコマツが瀕している危機? 遺伝子解析から明らかになったこと
4. 小林達明(千葉大・園芸) ミツバツツジとズミの保全生態学と市民

【問い合わせ】 日本植物分類学会第 12 回大会準備委員会 大会会長 綿野泰行

電話: 043-290-2819 e-mail: watano@faculty.chiba-u.jp

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 志賀 隆

日本植物分類学会第 12 回大会(於:千葉大学西千葉キャンパス)の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位のご出席をお願いいたします。

日時: 2013 年 3 月 14 日(木) 16:00~19:00

会場: 千葉大学西千葉キャンパス(千葉市稲毛区弥生町 1-33)

詳細は関係各位に追って連絡いたします。審議事項についてご意見やご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

2013 年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 志賀 隆・前庶務幹事 西野 貴子

3月16日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2012 年度事業報告案(13 ページ参照)
2. 2012 年度決算報告案(16 ページ参照)
3. 2013 年度事業計画案(14 ページ参照)
4. 2013 年度予算案(17 ページ参照)

2012 年度事業報告(案)

(1)集会等の開催

・学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会(日本植物分類学会第11回大会:3月22~25日 大阪学院大学)を開催した(ニュースレターNo. 45で報告)。

2012年度野外研修会を新潟県妙高山麓にて開催した(9月21~23日)(ニュースレターNo. 47で報告)。

2012年度講演会を大阪学院大学で開催した(12月22日)(ニュースレター本号で報告)。

・総会, 評議員会

年次総会を大阪学院大学で開催した(3月24日)(ニュースレターNo. 45で報告)。

評議員会を1回(ニュースレターNo. 45で報告), メール評議員会を3回(第1回は評議員による会長候補者の推薦についての会議でニュースレターNo. 45にて, 第2回はNo.47にて報告, および第3回は本号にて報告)開催した。

(2)出版物の刊行

・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第62巻2・3合併号, 第63巻1号(計2冊)を発行した。

和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第12巻1, 2号(計2冊)を発行した。

・ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』44~47号(計4冊)を発行した。

・植物分類学関連本『新しい植物分類学I・II』(講談社)の2冊を出版した。

(3)委員会活動

・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会(角野委員長)

・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会(樋口委員長)

・植物データベース専門委員会(伊藤委員長)

・学会賞選考委員会(ニュースレター本号で報告)(高宮委員長)

・論文賞選考委員会(ニュースレター本号で報告)(田村委員長)

・大会発表賞選考委員会(ニュースレター本号で報告)

・国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会(大橋委員長)

・普及のための教育委員会(仮称)の編成準備として幹事会での意見交換を行った。

(4)表彰

- ・日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)の授与を行った(ニュースレターNo. 44 で報告)。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った(ニュースレターNo. 44 で報告)。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った(ニュースレターNo. 44 で報告)。

(5)国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等への参加・連携を行った: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合。
- ・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「East Asian Botany Symposium 2012」の共同開催を行った(ニュースレターNo. 47 で報告)。
- ・第 13 回国際花粉学会議・第 9 回国際古植物学会議 合同会議(8 月 23~30 日 中央大学, ニュースレターNo. 47 で報告), 牧野富太郎博士生誕 150 年記念展『植物学者 牧野富太郎の足跡と今』(6 月 16 日~9 月 23 日: 高知県立牧野植物園, 2012 年 12 月 22 日~2013 年 3 月 17 日: 国立科学博物館本館), 微生物データベースの将来に関するフォーラム(2012 年 5 月 28 日: 玉川大学)の後援を行った。

(6)次期会長, 次期評議員の選出

会長・評議員の選挙を行った(ニュースレターNo. 46 で報告)。

(7)その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等を販売した。
- ・植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・学会 HP のサーバ変更, およびサイト移転を行った。
- ・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「East Asian Botany Symposium 2012」への参加者のうち, 若手の会員に旅費支援を行った。

2013 年度事業計画(案)

(1)集会等の開催

- ・学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会(日本植物分類学会第 12 回大会: 3 月 14~17 日 千葉大学西千葉キャンパス)を開催する。

2013 年度講演会(12 月 21 日(土), 大阪学院大学)を開催する。

2013 年度野外研修会を開催する。

- ・総会, 評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催する(3 月 16 日)。

評議員会を開催する(3 月 14 日)。

(2)出版物の刊行

- ・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 63 巻 2, 3 号, および第 64 巻 1~3 号(計 5 冊)を発行する。

- 和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 13 巻 1～2 号(計 2 冊)を発行する。
・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』48～51 号(計 4 冊)を発行する。

(3)委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会
- ・普及のための教育委員会

(4)表彰

- ・日本植物分類学会賞(学会賞・奨励賞)の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

(5)国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う:日本学術会議,植物分類学関連学会連絡会,自然史学会連合,日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomist (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC)と連携する。
- ・2012 年度にひきつづき,牧野富太郎博士生誕 150 年記念展『植物学者 牧野富太郎の足跡と今』(2012 年 6 月 16 日～9 月 23 日:高知県立牧野植物園, 2012 年 12 月 22 日～2013 年 3 月 17 日:国立科学博物館本館)などへ協力をを行う。

(6)その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・植物分類学関連情報(学術集会,研究動向,出版物,公募)を収集し,ニュースレター,ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。

2012年度決算報告(案) (2012.12.31現在)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常(一般)	5000	755	3775000	4746580	△ 971580
通常(学生/海外)	3000	91	273000	279000	△ 6000
団体会員	8000	26	208000	240000	△ 32000
バックナンバー販売			100000	166085	△ 66085
命名規約販売			20000	25000	△ 5000
利息			500	1042	△ 542
雑収入			50000	133570	△ 83570
小計			4426500	5591277	△ 1164777

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100000	100000	0
講演会補助費			50000	71740	△ 21740
出版物印刷費					
APG vol. 62(2/3), 63(1)	650000	5	3250000	1267770	1982230
分類vol. 12(1,2)	550000	2	1100000	1099560	440
ニュースレターNo. 44-47	55000	4	220000	202950	17050
英文校閲費			100000	80000	20000
出版物送料					
APG送料	80	5500	440000	72190	367810
和文誌送料	80	2000	160000	137251	22749
NL送料	60	4000	240000	112186	127814
会議費			50000	89633	△ 39633
学会賞表彰経費			60000	58452	1548
自然史学会連合負担金			20000	20000	0
分類学会連合分担金			10000	10000	0
事務局管理費					
消耗品費			50000	23268	26732
交通費			100000	130750	△ 30750
アルバイト賃金			300000	383021	△ 83021
封筒等印刷費			0	0	0
通信費(小包手数料を含む)			70000	18090	51910
手数料・その他			30000	24450	5550
自動振替集金代行基本料			3150	3150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	24423	△ 3003
自動振替新規手数料			0	0	0
レンタルサーバー使用料			20000	25200	△ 5200
国際シンポジウム積立金			300000	300000	0
予備費			150000	164000	△ 14000
合計			6844570	4418084	2426486

単年度収支	△ 2418070	1173193	△ 3591263
前年度からの繰越金	10121805	10121805	0
次年度への繰越金	7703735	11294998	△ 3591263

- 注1: 植物分類地理学会の口座解約に伴う振替払出及び著作権使用料
注2: 予算時に計画した5号分のうち、APG63(2,3)は2013年度へ繰り越し
注3: 為替レート(円高)により減額
注4: 複数誌の同時発送により節約
注5: 幹事引継のための会議および評議員会議費を含む(会議室代、お弁当代)
注6: 幹事引継会議を含む
注7: 年始年末の会計作業補助および年次大会における会計作業補助
注8: 一部プラン変更に伴う料金変更
注9: 選挙用紙送付および学会賞受賞者の大会参加補

特別会計 2012年度決算

収入	2012年度予算	2012年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2196011	2196011	0
国際シンポジウム積立金	300000	300000	0
寄付(第11回大会準備委員会)	0	400000	400000
利息	0	0	0
合計	2496011	2896011	△ 400000
支出			
命名規約和訳出版	200000	0	△ 200000
国際シンポジウム準備金	0	0	0
日中韓シンポジウム若手派遣	0	50000	50000
次年度への繰越金	2296011	2846011	550000
合計	2496011	2896011	△ 400000

- 注1: 2012年大会運営費からの余剰分。
注2: メルボルン規約原文出版の遅れのため。
注3: 1人を派遣した。

2013年度予算(案)

収入の部		単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費						
通常(一般)		5000	735	3675000	△ 100000	注1
通常(学生/海外)		3000	92	276000	3000	注1
団体会員		8000	24	192000	△ 16000	注1
バックナンバー販売				100000	0	
命名規約販売				20000	0	
利息				1000	500	注2
経収入				50000	0	
合計				4314000	△ 112500	
支出の部						
大会補助費				100000	0	
講演会補助費				50000	0	
出版物印刷費						
	APG vol. 63 (2.3), 64 (1.2, 3)	650000	5	3250000	0	注3
	分類vol. 13 (1.2)	550000	2	1100000	0	
	ニュースレターNo. 48-51	55000	4	220000	0	
英文校閲費				50000	△ 50000	注4
出版物送料						
	APG送料	80	5500	440000	0	注5
	和文誌送料	80	2000	160000	0	
	NL送料	60	4000	240000	0	
会議費				50000	0	
学会表彰経費				60000	0	
自然史学会連合負担金				20000	0	
分類学会連合負担金				10000	0	
事務局管理費						
	消耗品費			50000	0	
	交通費			100000	0	
	アルバイト賃金			470000	170000	注5
	封筒等印刷費			250000	250000	注6
	通信費(小包手数料を含む)			70000	0	
	手数料・その他			30000	0	
	自動振替集金代行基本料			3150	0	
	自動振替口座確認手数料	126	170	21420	0	注7
	自動振替新規手数料			0	0	注8
	レンタルサーバー使用料			26000	6000	注9
国際シンポジウム積立金				300000	0	注10
予備費				100000	△ 50000	注11
合計				7170570	326000	

単年度収支	△ 2856570
APG63(2.3)を除いた単年度収支	△ 1380570
前年度からの繰越金	11294998
次年度への繰越金	8438428

注1: 会員数見直しによる(名誉会員増、退会・除名・逝去など)

注2: 前年度までの実績に応じて変更

注3: 2012年度未発行分(vol.63 no.2,3)を含める

注4: 前年度までの実績に応じて変更(2人→1人)

注5: 編集業務補助を追加した他、前年度までの実績に応じて増加

注6: 執行部変更にとまなない新たな封筒印刷が必要になるため

注7: 自動振替サービス利用者数変更による

注8: 新規手数料がかからなくなったため

注9: 一部プラン変更に伴う料金変更

注10: 2014年度も30万円を計上予定

注11: 選挙および幹事引継が無いため

特別会計 2013年度予算(案)

収入		2013年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金		2846011	650000
国際シンポジウム積立金		300000	0
利息		0	0
合計		3146011	650000

支出

命名規約和訳出版		1800000	1600000	注2
国際シンポジウム準備金		0	0	
日中韓シンポジウム若手派遣		350000	350000	
次年度への繰越金		996011	△ 1300000	
合計		3146011	250000	

注1: 2012年度より一般会計から移管。2014年度も30万円を移管予定。2014年に90万円支出予定。

注2: 出版にとまなう経費(会議費含む)。2012年度に未執行分(20万)を追加計上。

寄稿

学名のラテン語(12)

永益 英敏(京都大学総合博物館)

種と種内分類群の学名の形容語—形容詞 3

前回と前々回において、ラテン語の形容詞の2つのグループ、第一第二変化形容詞と第三変化形容詞について述べた(永益 2012a, b)。

学名の形容詞としてはもう一つ、ギリシア語の形容詞の語尾をそのまま持ち込んだ形容詞がある。それは「～に似た、～の形の」を意味する *-oides* という語尾をもつ形容詞に代表されるグループで、Botanical Latin (Stern 1992)ではC群(Group C)として扱われている。

-oides という語尾は、ギリシア語の連結辞 *-o- + eidēs* (εἰδής < εἶδος 形)に由来し、名詞について、たとえば *asteroides*「Asterに似た」という形容詞をつくる。この語尾は英語でもアンドロイド *android*、小惑星 *asteroid* (こちらの場合は *aster*「星」に似た)などでおなじみである。

この群には他によく似た語尾の *-odes* もある。こちら名詞について「～に似た」を意味する形容詞をつくるが、「～の匂いのする」という形容詞語尾の *-ōdēs* から派生して「～の形状の、～に似た」という意味になったと推定されている。この語尾本来の意味で学名に用いられる形容詞に *euodes*「よい匂いのする」がある(例: *Heliotropium euodes*)。その他にも同様の語尾をもつ形容詞に *epiphloeodes*「樹皮上生の」、*endophloeodes*「樹皮内生の」などがある。

このような語尾を持つ形容詞は、単数では男性・女性・中性とも *-oides* または *-odes* のままで変化しない(複数形では中性のみ *-oida*, *-oda* となる)。

これらの語尾を持つ形容詞が名詞として属名あるいは属の下位区分の学名に使われる場合、国際藻類・菌類・植物命名規約(McNeill et al. 2012: Art. 62.4)では必ず女性として扱われるが、国際動物命名規約(International Trust for Zoological Nomenclature 1999: Art. 30.1.4.4)では男性として扱われる(ただし原著者が異なる性を採用している場合にはそれが優先される)ことにも注意しておきたい。

しかしながら、ギリシア語的な語尾はラテン語で活用させるのはむずかしいため、たとえば *-oides* にはよりラテン語化した語尾 *-oideus* をもつ形容詞が派生している。この語尾をもつ形容詞は第一第二変化形容詞として *-oideus*, *a*, *um* と変化する。上に例としてあげた *epiphloeodes* にも同様の意味を持つ第一第二変化形容詞の *epiphloeodicus*, *a*, *um* がある。よく似ていても単数では性によって形が変化しないC群形容詞とは異なる形容詞である。

International Trust for Zoological Nomenclature. 1999. International Code of Zoological Nomenclature, Forth Edition, adopted by the International Union of Biological Sciences. The International Trust for Zoological Nomenclature, London.

McNeill, J., F. R. Barrie, W. R. Buck, V. Demoulin, W. Greuter, D. L. Hawksworth, P. S. Herendeen, S. Knapp, K. Marhold, J. Prado, W. F. Pud'homme van Reine, G. F. Smith, J. H. Wiersema & N. J. Turland. 2012. International Code of

Nomenclature for algae, fungi, and plants (Melbourne Code), adopted by the Eighteenth International Botanical Congress Melbourne, Australia, July 2011. Koeltz Scientific Books, Königstein.

永益英敏. 2012a. 学名のラテン語(10) 種と種内分類群の形容語—形容詞 1. 日本植物分類学会 ニュースレター 45: 17–18.

永益英敏. 2012b. 学名のラテン語(11) 種と種内分類群の形容語—形容詞 2. 日本植物分類学会 ニュースレター 46: 6–7.

Stern, W. T. 1992. Botanical Latin, 4th ed. David & Charles, Newton Abbot Devon.

書評

きのこの不思議—きのこの生態・進化・生きる環境
(子供の科学★サイエンスブックス)

保坂健太郎／著 誠文堂新光社／発行 ISBN:978-4-416-21258-5 定価:2,310 円(税込)
96 ページ

タイトルは子供の本だが、大人が読んで面白い。私は真剣に読んでしまった。全体は10章にわけられており、7章までが、きのこ学入門、そのあとの3章が、きのこ研究の面白さを伝える部分となっている。きのこ学入門のところにも、2章「きのこの不思議な形の秘密」で、地下生菌になったきのこ類についての深い考察が披露されていたり、きのこの派手な色や発光についても、独自の前向きな意見がのべられたりして、子供でなくてもわくわくする。3章「太古のきのこの秘密」でも、分子時計、謎の化石プロトキシシーテス、琥珀化石などが正面から紹介されており、著者と一緒に菌類の進化を推理していくような気持ちにさせる。

後半部分で特に面白かったところは8章「きのこ博士の研究」。若い著者がこれまで、きのこの進化と不思議をたずねて旅したハワイ、ニューカレドニア、ニュージーランド、カメルーンなどの調査の様子が、興味津々で20頁にわたり紹介されており子供の夢をかきたてる。最後は「もっと行きたいところ」の南極で締めくくられており、ここまで読むと著者と一緒に調査に行きたくなる。子供でなくてもわくわくする。

著者は1976年生まれ。日本の大学を卒業したあと米国のオレゴン州立大学で博士号を取得、シカゴのフィールド博物館で研鑽をつんだあと、2008年から国立科学博物館の職員となった。ほんとうによりひとが日本のナショナルミュージアムの菌類担当になってくれたものだと、心から思うような出来の本となっている。

植物分類学会の方々にとって、菌類分野の人々は結構謎に思われているようなところがあるが、本書を手にとったと、なんだ、興味の対象は一緒じゃないか、と安堵いただけるかもしれない。きのこの不思議を考えるひとときを与えてくれる本なので、是非、手にとってみてください。

(吹春 俊光, 千葉県立中央博物館)



編集室より

今号よりニュースレター編集担当を引き継ぎました。会費値上げを避けるべく厳しく会費取り立てをしていた会計幹事時代には、ここで「鬼の会計」などと揶揄されたこともありましたが、今度は自分がこの欄を書く立場になるとは・・・。「役立つ情報の詰まったニュースレター」を目指して、これから編集に取り組んで参りますので、ご寄稿もお待ちしております。また、こちらから原稿執筆をお願いすることがあるかもしれませんが、その際もどうかご協力をお願いいたします。

(ニュースレター幹事 海老原淳)

入会申込, 住所変更, 退会届, 会費納入, 購読申込
などは下記へご連絡ください。

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
国立科学博物館 植物研究部
日本植物分類学会 保坂 健太郎 (会計幹事)
Phone: 029-853-8967, Fax: 029-853-8401
E-mail: khosaka@kahaku.go.jp

会 費: 一般会員 5,000 円, 学生会員 3,000 円,
 団体会員 8,000 円
郵便振替口座番号: 00120-9-41247
加入者名: 日本植物分類学会

* ニュースレターに掲載された記事の著作権は日本植物分類学会が管理いたします。

平成 25(2013)年 2 月 25 日印刷
平成 25(2013)年 3 月 1 日発行

編集兼 茨城県つくば市天久保 4-1-1
発行人 国立科学博物館 植物研究部
 海老原 淳

発行所 新潟市西区五十嵐2の町 8050
 新潟大学教育学部
 自然情報講座
 日本植物分類学会